

報告者 箕面市議会議員 うえしまかずひこ 上島一彦

## 百人の会 山陽視察

平成15年6月14日～15日、百人の会は、慶徳和宏校長(当時56歳)が自殺した尾道市高須小学校と、模範的な「男女共同参画推進条例」を制定した宇部市を視察。参加者は、北川悟司・豊中市議、上島一彦・箕面市議、高山博光・福岡市議、三浦由紀・大分市議、長谷川潤・大阪府中学校教諭、清水包光・元中学校教諭、花川隆麿氏、増木重夫・事務局長の他、高須小には亀井郁夫・参議院議員に同行いただいた。

6月14日、高須小学校で、山崎建郎・市教育長、岡田圭史・県教委総務課長らに質問。

百人の会は平成11年、広島県立世羅高校の校長が自殺した際も調査に訪れている。このときの調査を踏まえ、慶徳校長の自殺原因に「日の丸・君が代問題」が関係しているとの指摘もあることから、メンバーから「広島県の教育は依然、改善されていない」と強い批判の声が出た。

また、県・市教委関係者だけが戒告などの処分を受けた事について、「当時の教諭らを処分していないのはおかしい」との意見もあった。

## ①尾道市立・高須小問題について

H10年5月、広島県教委は、文部省より13項目にわたる是正指導を受ける。

H11年2月28日、広島県立世羅高校の石川敏浩校長が自殺→「国旗国歌法」制定

H15年3月 9日、尾道市立高須小・慶徳和宏校長が自殺

7月 4日、尾道市教委の山岡将吉・教育次長が自殺

### 慶徳校長の悩み

高須小＝児童数716人・21学級（尾道市で2番目の大規模校）

P T A活動やこども会活動が活発であり、平成14年度は創立130周年事業を計画実施。

慶徳和宏氏は、広島銀行東京副支店長から、民間人校長に転身し、高須小に赴任。

●児童転出・・・H14年4月、着任早々、6年生児童1名が転出する事により、児童数が121名から120名となる→学級数が4学級から3学級に減り、教員定数も2名減となる→慶徳校長は、「自分の力が足りない為、2人の先生に辞めてもらわなくてはいけなくなった」と説明。

教職員は「校長がもっと頑張れば、4学級だったのに」と発言し、校長が困惑。

●**教頭の入院**・・・5月10日、藤井教頭が自宅で倒れ入院。

慶徳校長は学校運営の不安が重なり、市教委に休職願いを出すが、山岡将吉教育次長に激励され取り下げる。市教委は学校運営支援のため、職員を派遣。

5月28日、坂井教頭が着任→慶徳校長は「ほっとした」様である。

●**運動会**・・・5月2日、市教委より「各学校は、運動会の開会式で、国歌演奏に合わせて国旗掲揚を行い、国旗に注目する」事を、実施するよう指示。

5月13日の職員会議で、慶徳校長は「今年度から、国歌の演奏のもと国旗掲揚を行い、児童と先生はそれに注目する事になります」と説明。

教職員は、「なぜ、日の丸を揚げないといけないのか」、「注目したくない子もいる」、「地域で反対する実態を知っているのか」、「国歌演奏のカセットのボタンを押さない」、「校長、教頭であげて下さい」など、多くの教職員から厳しい口調で詰問された。

慶徳校長は「皆さんよろしくお願ひします」と、涙ながらに訴える。

→このいきさつを知ったPTA役員は、憤りを覚え、高須小教職員に抗議の電話をする。

→教職員は運動会のプログラムに、「国旗掲揚・降納」などの「式次第」をわざと記載せず、「来年度は、式次第を記載して欲しい」と言う校長の指示にも従わなかった。

教職員の妨害により、「式次第」がプログラムに記載されていないのは、市内31小中学校のうち、高須小だけである。

●**勤務評定**・・・9月2日、慶徳校長は職員朝会で、「子どもを挨拶で迎えたい」と話し、その後、登校時の挨拶を続けたが、一緒に校門に立つ教職員はいなかった。

9月5日、校長は「勤務評定」について、教職員との話し合いを持つが、教職員は校長に対して、「あなたは、授業を観ていないのに適正な評価は出来る訳がない」と発言。

●**うさぎ殺害事件**・・・10月26日、子供達が飼育しているうさぎ18羽中、17羽が惨殺される。PTAから、学校の安全管理の対応について厳しい意見を突きつけられる。

●**卒業証書授与式**・・・3月3日、市教委は校長会を開催し、卒業証書授与式における「しおり」の年号表記を「元号（西暦）」にするという指示を行う。

3月4日、慶徳校長は、職員朝会で「しおり」の年号表記について、「元号（西暦）にする」という意向を伝える。

これに対し、教職員は、「それはおかしいと思います」「今までどおりでいいじゃないですか」「これは校長の仕事ですよ」「私達にはできない」「いつも強制される事に校長はどう思っているのか」と発言し、校長の指示にまったく従わない。

●**再度、教頭が入院**・・・2月14日、坂井教頭が入院。

慶徳校長は、再度教頭不在の中で公務運営を行う状況となる。

市教委は職員を派遣して支援。

●**学校評価システム・人事評価制度の施工及び研修**・・・3月7日、16時から講師を招聘して研修会を行なったが、いつものように教職員は時間を守らず、20分遅れの開会となった。

研修終了後、講師は「この学校で大切なのは教職員の意識改革。時間を守れない、名札を付けない、服装はジャンパー、そういうところから学校は見られる。保護者や地域に公開し外部評価してもらわないと学校は変わらない」と述べ、慶徳校長も同意する。

●**藤井教頭の再病休**・・・3月7日の研修終了後、慶徳校長は「藤井教頭先生が引き続き休まれますが、3月11日の朝7時半にご挨拶に来られます」と教職員に告げる。前にいた教職員数人が立ち上がり、「何で来るんですか」「7時半にどうやって私達に来いというんですか」「来られる必要はありません。来させないで下さい」と発言。校長は、出る言葉も無かった。

●**慶徳校長の自殺**・・・3月9日（日）、慶徳和宏校長は、PTA、教職員と学校花壇の手入れ後、校舎西側の非常階段1階手すりにかけたロープで、首吊り自殺。

### 尾道市教育長ら11人処分

H15年5月9日、県教委と市教委は、慶徳校長への支援が不十分だったとして、常盤豊・広島県教育長と山崎健郎・尾道市教育長を戒告、県教委幹部4人と、山岡将吉教育次長を始め市教委幹部2人を文書訓告。

職員団体による校長権限の制約を許す学校運営上の課題を残した、真神田前校長を文書訓告、慶徳校長が悩む事になったティームティーチング（TT）に関してたらしめな指導記録をつけていた元高須小教員2人を厳重注意。

### 山岡教育次長の自殺

H15年7月4日、尾道市教委の山岡将吉・教育次長は、実家近くの林道で乗用車を止め、後部座席で首吊り自殺。

「教職員による執拗ないじめ」が慶徳校長の自殺の原因であるのは明白であるが、広島県教職員組合は、昨年5月、慶徳校長が退職願いを申し出た時に対応した山岡教育次長を責め続けていた。

### この問題の本質は何か？

広島県教職員組合(日教組)は、「民間校長反対」「学力テスト反対」「元号強制反対」「日の丸・君が代反対」等を運動方針に掲げており、高須小では94%の組織率を誇っていた。

教職員は校長の意に反した質問を繰り返し、職員会議を混乱させていた。

H14年の学級担任を決める際、広島県教職員組合・高須小分会が校長に校内人事案を示すなど、文部省の是正指導以前の体質が残っていた。

(匿名・告発文書の要約)

高須小の教職員組合は、新任の民間校長の職務能力について、**集団で日常的に非難し、人格を傷つけるほど、罵声を浴びせ続けた。**

教職員の理解を得ようと低姿勢で対応しようとする慶徳校長に対し、教職員組合は、**挨拶・会議等で無視する態度を取り決め、集団で実行した。**

民間出身の新任校長には答えられないような事を、全員の前で組織的に質問し、「**民間会社のエリートのおまえに何ができる。やってみろ！何も出来ないから。同和教育とは何か答えてみろ！**」などと脅迫。

自殺の原因は、広島県教職員組合・高須小分会の集団的いじめの結果である。

これは明らかに**言葉による暴力で人格を傷つけた、未必の故意による殺人事件**である。広島県東部で以前から起きている一連の事件が、未だに続いている証拠である。

報告者 箕面市議会議員 うえしまかずひこ 上島一彦

6月15日、広重市郎・宇部市議より、模範的条例である「宇部市男女共同参画推進条例」について説明を受ける。

## ②ジェンダー・フリーの恐ろしさ

「ジェンダー・フリーは男らしさ・女らしさを単に否定するだけでなく、日本人の人格そのものを崩壊させ、国家を滅亡させる新種の革命運動である。」中川八洋・筑波大教授

### ●1990年代半ば、ジェンダー・フリーという言葉が日本で登場

東京・八王子や北区の小学校の一部教師が、「ジェンダー度チェック」運動を開始。ランドセルを男女とも同じ色にする。男女混合名簿。体育の授業で男女を分けない。掃除の際、女子の机を運ばせ、男子に雑巾がけをさせる。学芸会で男女の役を総入れ替え。女子に騎馬戦をさせ、男子に料理や裁縫をさせる。

福岡の高校では、男子と女子が同じ教室で日常的に着替える。

→教育現場で性別秩序の破壊を実施

### ●1999年、男女共同参画社会基本法・伝統と慣習に従っての性別役割分担を否定基本法の制定により、フェミニズムと権力が一体化。

ジェンダー・フリーは、日本社会の解体を目指す共産主義者とフェミニストの連合による、新種の革命運動→単なる男女平等とか、女性の社会進出の話では無い。

## フェミニズム運動とは？

第1期 19世紀～20世紀半ば、婦人参政権運動・男女平等思想に基づく

第2期 ラディカル・フェミニズムとマルクス主義フェミニズムとの2つの流れ  
ラディカル・フェミニズム = 1960年代、ベティ・フリーダンが始めた、米のウーマンリブ運動。「男性に対する憎悪」「レズビアンこそ理想の性」  
マルクス主義フェミニズム = 階級闘争史観を男女の関係に当てはめる。専業主婦を否定する、家族解体思想。上野千鶴子が代表。

第3期 フェミニズム運動に、ジェンダーという概念が導入される。

セックス = 生まれながらの身体的な性

ジェンダー = 社会的・文化的に作られた性

ジェンダー・フリー = 性別秩序の破壊を意味する造語。海外では通用しない。

→人間の性は、胎児の時より「脳の性差」によって決まるものであり、社会によって性差が作られるとする、ジェンダーの科学的根拠は無い。

### 男らしさ、女らしさとは？

男子は男らしく、女子は女らしく育てる社会的機能＝本来持って生まれた性差をより磨く事により、人間を単なる動物の雌雄のレベルを超えた、より高級な生き物へ高める為のもの。

●男女の性差は、「脳の性差」という生物学的な根拠に基づくものである。

男女の性差は悪であるどころか、人間社会が存続していく為に絶対必要。

男女の性差は、人類の知恵である。

第3期フェミニズムは、男性から男らしさを奪い、女性から女性らしさを奪おうとする運動である。

### 人格を破壊するジェンダー・フリー教育

人格教育＝「男の子を男らしく、女の子を女らしく」が基本

→ジェンダー・フリーは人格教育を全否定。

自我が形成される幼少期から思春期にかけて、男女の区別をしないと人格が健全に作られず、性同一性障害や同性愛に陥る危険がある。

●「両性具有や無性人間が、理想の人間である」と、学校で教われば、子供達の人格は著しく歪められる

→ジェンダー・フリーは雌雄同体のカタツムリが理想。

特に男子の場合、心理的に去勢されてしまい、男性にとって必要な積極性を失う。

●夫婦の役割分担意識が全く無くなれば、結婚しようという意欲も消える

→結婚離れの助長と少子化による破局

結婚しない、家族を持たない、子どもを産まない若者が急増→日本の人口は確実に減少

日本の若者の未婚率＝25～29才世代で、男性70%・女性54%

(女性の同世代の未婚率は30年前と比べ、36%増)

日本女性の合計特殊出生率＝1.32人→破局的な少子化社会へ転落

→超高齢化社会では、現行の年金・医療・介護のシステムを支えることが出来なくなる

### 父性と母性の解体

●父性＝家族をまとめ、我が子に善悪の判断力、秩序感覚、社会のルールなどを身につけさせる父親の役割

●母性＝我が子を可愛いと感じ、慈しみ、養い、育てる母親の保育行動

→ジェンダー・フリーは、父性・母性を否定し、解体する

林道義・東京女子大教授・

「外で働く事にしか価値を認めない、働けイデオロギーは、母性本能にとって有害」  
 「そもそも父とは無理をしなければ務まらない役目であり、母が自然であるとすれば、父は理想なのだ。父とはしんどさに耐え、理想を追求するので無ければ存在意義が無くなる」

●ジェンダー・フリー教育により、子どもの頃から「無理をするな、楽になれ」という価値観を教え込まれた男子には、父性が健全に育たない。

●ジェンダー・フリー教育を受けた子どもは、極端な男女同型イデオロギーに洗脳され、父性・母性が健全に育っていない為、健全な家族を築く事が不可能  
 →離婚や幼児虐待などの家族崩壊現象が、激増する

### サイレント・ベビー現象

父性や母性の欠けた親→子どもの人格形成が歪められる

●幼児期に母親との十分な触れ合いが無い子どもは、思春期になって心の病(心身症・神経症・人格障害など)に陥りやすい。

●サイレント・ベビー=泣かない、笑わない、母を求めない、静かな赤ちゃんの増加  
 →わが子を受せず、コミュニケーションがとれない母親、母性の欠けた母親が原因

●少年犯罪の増加→母性の解体现象と因果関係

母親への愛情の飢餓感や不満感は、子どもの攻撃性を増大させ、自暴自棄にさせる。  
 スウェーデン=育児の社会化→出産後間もない幼児を母親の元から引き離し保育園で育てる→子どもの犯罪が急増し、世界一の犯罪大国となる

### 日本の最大の問題=ジェンダー・フリー教育に対する危機感が無い！

ジェンダー・フリーは子どもの健全な人格を破壊し、結婚離れを加速させる。

そうなれば、家族が崩壊するだけでなく、社会の崩壊にも直結する。

アメリカ人は、空理空論を振りかざすフェミニズムに対する軽蔑心と警戒心が強い。国民の大多数は拒絶反応を示す。

上野千鶴子(フェミニズム運動のボス)「フェミニズムは女性の解剖学的宿命から脱する為に、もともと女性詞・男性詞をさす文法用語に過ぎなかったジェンダーに新しい意味を与え、再定義して使用したのです」→ジェンダーは性差をつぶす為に考えられた屁理屈である